

と店のお姉さんも目線をくれる。

今年揃って61歳になる夫婦は月に2、3度来店。「来ればいろいろ食べたくて、今もメにふく鍋を頼むかどうか相談してたところ」と夫が言えば、妻も「ふたりには多すぎるの」。3人でちょうどよい量らしい。

その鍋、しっかりとダシの利いた、酒がすすむ鍋だった。口が滑らかななる鍋とも言え、「ぼくらの付き合いは中学3年から」と、弾む話の自然な流れは馴れ初め話に至る。ずいぶん早熟じゃないですか、と茶化すと、「早く家族が欲しかったんです」なる予想もしない答えが返ってきた。「ぼくは中学時代の1年間に3度姓が変わった。父が死んだあとの、おふくろの再婚、すぐの離婚、また再婚で。そうになると、もうおふくろはぼくにとって他人のような気がして。だから、自分の家族が欲しかったんだと思う」

少年の切ないまでの感情が聞く者の胸にもよみがえる。目の前の仲睦まじさに、支え合う日々が重なり映る。幅の狭い簡素な座卓は、人生の機微が湯気に映るほど人を近しくする。小上がりの並ぶ店、きんかん。はたして、それぞれの小空間ではどんな話が語られているのだろうか。



店にカウンターはなく、通路の両側すべてが小上がり席だ。となれば、ひとりの客は気後れしそうなところ、4人がけの座卓に片肘をつき、しみり飲む人もいる。夕刻のひととき、そんな一人客の「片肘オンパレード」ということもあるらしい。

衝立と壁で三方を仕切られ、開放された通路側も、透明なカーテンが降りたかのように、小空間の独立性は高い。それが小上がりの特徴だろう。しかも、いまどき珍しい簡素な座卓。幅も狭く、無聊をかこつ身の腰の落ち着け先としてはかっこうのしつらえだ。

とはいえ、週末の午後7時をまわった今、店は満席。通路には革靴、スポーツシューズ、ハイヒール、味自慢、サングラスなど客層の幅広さを物語る履物が並び、幼児の小さな素足までぶらぶら見えている。

そんな中、夫婦連れから「いっしょに飲みましょう」と声がかかった。「この店は誰もが長っ尻。席が空くのを待ってたら、あっという間に終電ですよ」。言われて、遠慮なく靴を脱いでいた。あら、よかったわね、

物語のある居酒屋

三軒目

文・撮影 大野金繁

竹崎町

きんかん

